

首里城と『おもろさうし』

波照間永吉（名城大学大学院博士課程特任教授）

1、『おもろさうし』とオモロ

(1) オモロとは——グスク時代から王国時代にいたる古琉球社会においてうたわれていた祭祀歌謡。

・こゝに勝連おなぢやは首里天の御女ニ而御座候処、もゝとふみあがれの按司と神御名御付めされたる由候。勝連按司逆心差起、首里へいくさ寄候企に付、鬼大城と申おなぢやらへ此段申上、則大城、おなぢやらを負上、夜中に首里へ逃走候を、勝連按司より打手之者、炬松を付、わにやまと申浜追付可及大事ノ処、御神より此おもろ被下候付而、則大城大声ニ而おもろ仕候処、俄に黒くもおこり、北方へは石あめほり、炬松火をさし候付、打手可及行様無之候。南方へは明み申ニ付、大城は急に首里へ走登り、大難のがりたる由也

6-342

一 百度踏み上がりや  
 天地 よためかちへ  
 天 鳴らちへ さしぶ 助けわちへ  
 又 君の踏み上がりや  
 又 今日の 良かる日に  
 又 今日の 輝る日に

・鬼大城、おなぢやらを負上、赤田御門へ参り、勝連按司逆心之次第御取次申上候処、夜中に男女只式人参候は御ふしんに候間、先御門開間敷由御返事御座候処、則御神より此おもろ給候に付、則大城、大声上おもろ仕候処、自然、御門之鎖子はさらゝと開たる由候也

6-342

一 百度踏み上がりや  
 降れて遊びよわれば  
 迎え誇ら  
 又 君の踏み上がりや  
 [降れて遊びよわれば]  
 又 成さの貴み子が  
 おわるでゝ 知らにや

(外間守善・波照間永吉『定本おもろさうし』pp236・237)

・『球陽』尚清王の項「首里の湛氏、三たび神歌を唱へてにわかには波濤を静む」(211項)  
 (前略) 幼稚の時より深く神歌を嗜み、朝夕詠謡して敢へて懈怠せず。壮年に及ぶころ、詠謡妙を得たり。嘉靖年間、聖主、久高島に行幸す。(中略) 中洋に回到するや、黒雲四に起り、風雨頻りに至り、東西分たず、狂浪澎湃として進退共に難し。是に於て、湛氏、鷁船の頭に立ちて、神歌の曲を謡ふ。再三歌謡して、風波漸く静かに、天面四開して、鷁船恙無く与那原に到る。聖主より深く褒美を蒙り、家来赤頭職に擢ん

でられて、神歌頭と為り、黄冠を頂戴す。(『球陽』研究会『球陽』読み下し編 p166)  
 (2)『おもろさうし』とは——オモロを首里王府で編集して書物としたもの。全22巻より成り、1554首が収録。その成立は第1巻が1531年、第2巻が1613年、第3巻以下が1623年。それぞれの巻には表題が付く。

巻	表題	歌数	内容	編集年次
1	きこゑ大ぎみがおもろ	41	第二尚氏の最高神女のおもろ	1531
2	中城、越来のおもろ	46	中城、越来地方のおもろ	1613
3	きこゑ大ぎみがなしおもろ	64	三二首は巻一と重複	1623
4	あおりやへ、さすかきのおもろ	60	聞得大君につぐ二人の高級神女のおもろ	1623
5	首里おもろ	79	首里のおもろ	1623
6	首里大君、せんきみ、君がなし、もゝとふみあがり、きみのつんじのおもろ	54	四人の高級神女のおもろ	1623
7	はひのおもろ	48	南部(首里)のおもろ	1623
8	おもろねやがり、あかいんこがおもろ おもろ	八三	おもろの名人ねあがりとあかいんこのおもろ	1623
9	いろいろのこねりおもろ	35	こねりすなわち舞の手を記入したおもろ	1623
10	ありきゑとのおもろ	45	舟の漕行、行進歌	1623
11	首里ゑとのおもろ	96	表題は誤りで、内容は巻二一とほぼおなじ	?
12	いろいろのあすびおもろ	94	神遊び、舞遊びのおもろ	1623
13	船ゑとのおもろ	236	舟歌(帆走)のおもろ	1623
14	いろいろのゑさおもろ	70	集団舞踊を伴うおもろ	?
15	うらおそい、きたたん、よんたむざおもろ	75	浦添、北谷、読谷山、宜野湾、牧志地方のおもろ	1623
16	勝連、具志川おもろ	48	勝連、具志川、与那城のおもろ	1623
17	恩納より上のおもろ	74	国頭地方および付近の離島のおもろ	?
18	しま中おもろ	32	島尻、玉城付近のおもろ	1623
19	ちゑねん、さしき、はなぐすく おもろ	50	知念、佐敷、玻名城(具志頭)地方のおもろ	1623
20	こめすおもろ	63	米須(摩文仁村)および付近のおもろ	1623
21	くめの二間切おもろ	114	久米島のおもろ	1623
22	みおやだいらおもろ	47	公事の神歌	?

## 2、『おもろさうし』に謡われた首里と首里城

### (1)「しより」(首里)「しよりもりぐすく」(首里杜グスク)

①「しより」(5-217)

②「しよりおやぐに」(首里親国)(1-7、7-354・390)

1-7

一 聞得大君ぎゃ

十嶽 勝りよわちへ

見れども飽かぬ 首里親国

又 鳴響む精高子が

又 首里杜ぐすく

又 真玉杜ぐすく

③「しよりもり・まだまもり」(首里杜・真玉杜) (3 - 88)

④「しよりもりぐすく・まだまもりぐすく」(首里杜グスク・真玉杜グスク) (1 - 1、5 - 239・240、7 - 376、13 - 756)

13 - 756

一 首里杜ぐすく

中辺清らぐすく

だりじょ 上下 鳴響め

又 真玉杜ぐすく

13 - 757

一 首里杜ぐすく

雲風す 寄り添へ

後が末 精軍 寄せるまじ

又 真玉杜ぐすく

## (2) 『おもろさうし』に謡われた首里杜グスクの御嶽

①「けおのうち」(気の内〈京の内〉) (6 - 291)

②「かわるめのみうち」(カワルメの御内〈苧銘御嶽〉) (4 - 195)

③「みものうちのまみや」(見物内の真庭) (4 - 206)

④「いろのべ」・「まだまべ」(イロノベ・真玉べ) (1 - 23)

⑤「くになかのもり」(国中の杜) (3 - 101)

⑥「くもこたけ」・「あおりはな」(雲子嶽・煽り端) (9 - 490)

⑦「あがるたけ」・「みやぐむたけ」・「よつたけ」(揚がる嶽・見あぐむ嶽・ヨツ嶽) (3 - 101)

⑧「まもんうち」(真物内) (8 - 428) / 「ま物おどん」(5 - 232)

参考: 「そのひやぶ・かなひやぶ」(園比屋武・金比屋武) (7 - 357)

## ※ 『女官御双紙』に記載された首里城内の御嶽=首里十嶽

①赤田御門のあがるい嶽押明森の御いべ ②御内原のみもの内のかわるめの御いべ

③「みものうちのまみや」(見物内の真庭) ④寄内のみやがもりの御いべ ⑤寄内のかみぢやなみぢやてらの御いべ ⑥真玉城の玉のみやの御いべ ⑦きやうのうちしきやちしきやたけ御いべ ⑧きやうの内のそのいたしきの御いべ ⑨きやうのうちのあがるいの御いべ ⑩きやうの内の前の庭首里の御いべ

## (3) 『おもろさうし』に謡われた首里杜グスクの建物

①「あまゑのぢやう」(歎ゑの門=歎会門) (5 - 280)

②「ひがわぢやう」(樋川門=瑞泉門) (5 - 220)

※「しよりおやひがわ」(首里親樋川=瑞泉=龍樋) (8 - 436)

③「あかたぢやう」(赤田門) / 「すへのぢやう」(精の門) (5 - 221)

④「そへつぎ」(精継ぎ)・「すへつぎみもんいちやぢや」(精継ぎ見物板門) (3 - 101)

- ⑤ 「もゝうらおそい」(百浦襲い)・「よそわり」(世添わり)・「すゑのおどん」(精の御殿)・「うらおそい」(浦襲い) (5 - 250・262・264・285、13 - 755)
- ⑥ 「きみほこり」(君誇り=君誇殿?) (4 - 195)
- ⑦ 「よりみちへ」(寄満)・「せぢよせ」(セヂ寄せ) (1 - 40、7 - 345)
- ⑧ 「さんこうり」(三庫裡)・「さんみあしやけ」(サンミアシャゲ) (1 - 40、4 - 185)
- ⑨ 「おくら」(御蔵)・「すゑのくら」(精の御蔵)・「くらなみ」(蔵並み) (5 - 287・288)
- ⑩ その他——「首里まちやおどの・ぐすくまちやおどの」(首里マヂヤ御殿・グスクマヂヤ御殿)、「ぐすくおどん・しまうちおどん」(グスク御殿・島討ち御殿)、「世そうみおどん」(世添う御御殿)、「世かほうかなふく」(世界報金福)

### 3、『おもろさうし』に謡われた首里城での祭儀

#### (1) 王権儀礼

##### ① 君手摩りの百果報事 (『中山世鑑』記事とオモロ)

・「御即位ノ年ノ二月ニ陽神キミテスリ現シ給ケレハ尚宣威是ハ必定我カ慶賀ノ為ニヲリサセ給ノ神ニテアルラント悦思召テ、ヲヌシハ帝坐ニ付セ給テ、久米中城王子ヲハ帝坐ノ腋ニソ立給旧例ニハノ君々神々内原ヨリ出給テ、キミホコリノ前ニ東面ニ立給ケルカ今度ハ例ニ替リ西面ニソ立給ケルノ去程ニ上君ヲ初トシテ下老若男女ニ至ルマテ是ハソモ何事ヤラント魂ヲ冷シ手ヲ握リカタツヲノ飲テ居タル処ニ宣託有ケルハ 首里ヲハルテダコウカヲモヒ子ノアソヒモノアソヒナヨレハノミモノ、トヲモロヲソメサレケル尚宣威聞ノ召給テ我其徳ニ非スシテ帝坐ヲ汚シタル事是天ノトカメ有ケルソヤトテ在位六箇月ニシテ御位ノヲノカレテ世子久米中城王子ヲソ即位成奉リ給是為尚真公」(拙編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅲ)歴史・文学』p59)

※オモロは 12 - 663 である。

・「嘉靖二十三年甲辰六月廿日世續ノ石墻普請被仰出同廿五日ヨリ始リ 嘉靖二十四年乙巳八月十九日天神キミテスリ出現有テ尚清王ノ御即位ノ寿ヲソシ給ケル其ノ寿祝ノオモロ左ニ記ス

きこゑ大きみきやすゑゑらひやりおれわちへあんしおそいしゆきみきやノせちもちよわれとよむせたかこかませねかておれわちへ

いけなきみそノろゑてなりきよかみあとゑて、としやとせなるきやめおほつたけおきノつめゑかやとせなるきやめかくらたけおきつめあんしおそいかおこときノみてつりまとうさわうにせかおことみものあすひまと<sup>(ママ)</sup>らさ大ころたそノろへてもりやへこたあとへてきみいきよいこのめぬしつかいこのめつかいてノよしられおことてノよしられあかくちやかよいつきおほつたけとよてあんしおそいかおこと大きみにしなてあち(拙編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅲ)歴史・文学』pp67・68)

※嘉靖二十四年は 1545 年。オモロ 12 - 694 に同じ。同オモロの詞書は「尚元王御代ノ嘉靖二十四年乙巳の年、きみてずりのもゝがほうことの時に、八月十九日己の酉日寅の時に、きこゑ大君の御まへより給申候」。

※最後の「あち」は 694 にはナシ。

・嘉靖二十四八月十九日つちのとのとりのへにとらの時に きこゑ大きのみ御まへ  
よりもゝかほうことの時に給しかくらとよての／ふし

一 きこゑ大ききやとよむせたかこかさしふおれなおちへ

おほつゑかとりよわちへたしまきらなおちへかくらゑかとりよわちへたきよりき  
らなおちへあんしおそいかおことわうにせかおこと大き／みはのたてゝきみゝど  
はのたてゝあまこあわちへおかまみきやうあわ／ちへてつらあかくちやかよいつ  
きせらちへんにとよてけらへ大ころたあん／しおそいによしられきみゝどもほこ  
てぬしゝどもほこて、」(拙編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅲ) 歴史・文学』p68)

※オモロ 12 - 695 に同。同オモロの詞書は「尚元王御代／嘉靖二十四年乙巳の年、  
きみてづりのもゝがほうことの時に、八月廿五日きのとのうのへうまのときに、  
きこゑ大きのみ御まへより給申候」。

・「嘉靖二十五年丙午七月廿八日世續石墻普請功畢ル其記左ニ記ス

すゑつき御門の南のひのもん

首里の王天つきわうにせのあんしおそいかなし天のみ御事にすゑつきの御／ちや  
う御いしかきつみ申候時のひのもん (中略)

嘉靖二十五年ひのへむまの年八月一日みつとのとりのへにきこゑ大ききみ／き  
みのおれめしよわちへまうはらいのときに御せゝる御たほいめしよわ／ちへ『首里  
森またま森けらへてくもこたけ世つきたけおりあけわちへつ／みあけわちへよのこ  
しあてあをりやたけをりあけわちへつみあけわちへ』／すゑつきのみむのいちやち  
やけらへわちへ御いわひめしよわちへ御おもろ御た／ほひめしよわちへことおもひ  
くわへくにゝどのあんしへ (中略) また九月三日ひのとのみのへににるやの大ぬ／  
しきみゝどの御のほりめしよわちへ 首里天つきのあんしおそいかなしみ御みつか  
いめしよわちへ御ゆわひめしよわちへ御おもろ御たほいめしよわちへてた／そろて  
みはいおかみ申候又ちやうらうそうたちそろて御いしかきの／御くやうの御ゆわひ  
申候 (以下略) (拙編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇Ⅲ) 歴史・文学』pp68・69)』

※ミセセルは『南島歌謡大成 I 沖縄篇上』のミセセル 18 参照。オモロは、最  
初の聞得大君らのオモロは 3 - 101、ニルヤの大主らのオモロは 3 - 100 にあ  
たるとみられる。

② 「けおのうち」での儀礼——国王と神 (6 - 360、4 - 199)

(2) 「みおやだいら」(御親内裏=御公事) とオモロ

卷 22 中の首里城での公事

- ① 稲の穂祭り (22 - 1508 ~ 1516)
- ② 稲の大祭り (22 - 1517 ~ 1528)
- ③ 知念・久高行幸の時・首里城御打立之御時 (22 - 1529)
- ④ 雨乞いの御時 (22 - 1546)
- ⑤ 昔神世に百浦添御普請御祝ひの時 (22 - 1547 ~ 1549)
- ⑥ 唐船すらおるし又御茶飯之時 (22 - 1550)
- ⑦ 祝ひの時 (22 - 1551 ~ 1553)
- ⑧ 御冠船之御時 (22 - 1554)